

**同徳台同窓会**  
**2000年総会 (5. 11)**



**伝田 信夫**  
軍校1-1  
経理  
(春日部市)

**発端 経緯**

1980年代は、数次の訪中も遂に母校の門まで中には入れなかった。1990年代に入り念願の母校訪問をと在校1300余名の今猶生存する日系同窓生は、桜の植樹を企画し300万円余の募金を募ったがあつたと言う間に集まった。直ちに寒冷地の北海道で苗を育てた。苗も育ち植物通関の難かし問題も日中共同で解決した。1992年念願の桜贈呈母校訪問の旅に先輩、同窓、遺族或いは学校官舎で生まれた人が集り母校を初めて訪れることが出来た。このとき日系80名余、満系を含めた会合で桜が咲いたら花見をしようと180名余の人々が誓い合った。

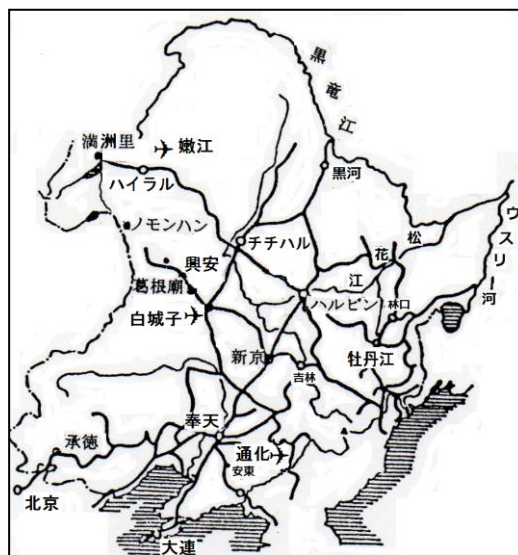
爾来約10年この間毎年の訪中がくり返され母校を訪れた。現地では満系7期(王士君営林署長:61期相当)等の努力が続き苗木は成長した。そして1999年、乾燥、水不足、消毒、等々幾多の苦難も克服し50

本の桜のうち数本が大地に根を張り、初めて開花したとの報告がもたらされた。

**大同窓会**

企画すること半年余、現地打ち合わせを重ね“2000年日中韓同學聯歓大会”(同徳台同窓会)が開かれた。日本より91名(遺族他10名余、同窓60名余、陸士他友校20名余)、中国側220名余、政府関係者を含め約350名(10余名の33卓)前後の大宴会が日中友好会館(日本同窓より一部寄付及び絵画贈呈)で行われた。

集まるメンバーは米国、韓国、台湾(5名)、蒙古等より参加、正に5族(日、満、漢、鮮、蒙)の集まりであつた。満州国滅亡以来初めて最後の国境を越えた友情を誓い空前の大快挙となった。一同それぞれ感慨一入で肩を抱き合い長寿を祝い健勝を喜びあつた。吾々6期を見ると日本より10名、中韓より50名が集った。



**満州国要図**

**旅程**

日本側訪中団は健康を考え、又それぞれの想いを込めてA班[大連、旅順、長春(新

京) ]、B 班 [大連、旅順、長春、烏蘭浩特 (ウランホト=興安)、承德、北京、青島]、C 班 [B 班と同行ウランホトにて別れ一ハルピン、黒河、北京、青島]。特に C 班は 7 期 (陸士 61 期) を主流とし終戦後シベリヤに抑留された道を訪れた。7 期は終戦時シベリヤにて 83 名を失い昨年全遺骨の収集を終えた。さらに満州で 9 名、北鮮で 3 名、命を落としているが国状の差も有り今尚手の打ちようも無くその無念は永久に消えぬであろう。

B 班には埼玉より伝田と室屋が加わり、遺族先輩同窓 33 名、陸士経 6 名、韓国 2 名、蒙古 1 名、添乗員 2 名、政府外事弁 1 名、+各地にて案内人がつく編制であつた。

## 観光 (5/8—5/17)

### ◆5 月 8 日 大連

関空、福岡からの出国組は 13 時 10 分大連着。市内観光、大連泊まり (ホリディン大連)。

### ◆5 月 9 日 大連：日本同窓の結団式

成田組は、NH903 にて 10.50 発～13.05 大連着、市内観光後、夜は ABC 班集合日本同窓の結団式を行う。92 年大連を訪れてより 3 回目。大連市街は全く一新され、高層建物の中にかつては大きく見えた大連駅 (戦前大連駅は上野駅に模して威容を誇っていた) は埋没して見えだが、当時満州国の入り口大連港の埠頭の丸い階段、その前の満鉄本社ビルはそのままであつた。

観光バスのコースは高架が多く、アカシヤの並木、日本人住居、官舎等新しく変貌しつつあり、オンドルの煙突も少なくなった。

### ◆5 月 10 日 旅順：水師営、203 高地

大連空港出発迄、旅順観光に行く。途中の道路は全く変り整備され、前回の如く山間の林の中を黙々とバスが走り、ある地点を境に、開発区と軍港区が半世紀の差がある感を与える事はなかつた。

東鶏冠山は観光地化し、通路はジャリが敷かれ、要所にはコンクリートの建物が配置されていた。

水師営はこの前は紅衛兵の破壊に遭い無くなっていたが、今回は街の中に観光の店と共に再建されていた。

在校時、遊泳演習のひと時、砂埃の中を行軍し、たどり着いた路傍の一軒の廃屋とは異なり、周囲の変化が激しく隔世の感があった。

203 高地はあまり変化無く、旅順の港を一望した後大連空港に向かう。この空港は軍民併用で 3 回目の改装により、全く一新され初めての土地を訪れた感じがした。

チャーターした飛行機で一時間後、長春の空港に到着した。通関は一般の人とは別の通路にて無審査で空港外に出る。外は大勢の出迎え、熱烈歓迎の赤幕のもと、少年少女約 10 名が横一線に花束を抱え待機中、我が方も先輩顧問団 10 名が対面して並び、前進して花束を渡して右手を挙げてセレモニーは終わった。出迎えの中にはあの顔この顔、握手握手の一駒の一時であった。3 台のバスに分乗して日中友好会館の宿舎に向かう。

ホテルにて休憩後、この会館で長春市政府、友好協会主催の歓迎会が、日中韓全員 (総員約 350 名) を招き行われた。

### ◆5 月 11 日 長春：大山桜贈呈式、平和記念碑除幕式、日中韓同学聯歡大会

10時 長春動植物公園で桜贈呈式と平和記念碑除幕式（いずれも日本同窓会より長春市へ贈呈）が行なわれたが、桜は満開を過ぎていた。碑の左面には（長春市へ贈呈～日本大山桜～日中同学不変の友情を願い～日中人民の友好と世界恒久平和を祈念します～2000年5月～日本同徳台同窓会）、右側は（贈長春市～日本大山桜記念～願中日同学友誼中日民友好和世界和平永存～二零零零年五月～日本同徳台同学会）と刻まれていた。

全員で式を済ませ午後は郊外の拉々屯（ウラトン）南崗台にある母校の「陸軍軍官学校」訪問の予定であったが、北京の判断か校内入域は許されず、写真も厳禁 10余年前と同じ状態である。それでも吉林街道をバスを連ね小高い石碑嶺に行くも学校は見え、引き返して学校の前を歩き外より見る。学校の前の中庭の中の官舎で昭和18年に生まれた故功上尉の遺児（58歳）が赤煉瓦の塀の上に登り、生まれたと思しき家を必死に写真を撮っていた様子は印象的であつた。学校訪問が許されず心を残してホテルに戻る。

休憩後夕刻より日・中・韓同学聯歡大会が開かれた。総勢 350 名に近い大会である。我々の卓は【秋-16】番で中国側は 2 期および夫人、3 期および夫人、5 期、7 期 2 名、日本側は 60 期室屋、坂巻、伝田の 10 名であつた。ミスプリントで伝田は 2 期と誤植され先輩卓扱とされそうになり面食らった。中央壇上では次々とマイクが交換され日本側は、夫人の日本舞踊、60 期小山内の歌、中共に 10 年居た 1 期の中国語の歌等々尽きることなく続く、芸人の中国の曲芸もあつた。この間各席を廻り用意

した土産を渡す。



2000 年日中韓同学聯歡大會

6 期（60 期）では、韓国の金東勲、ハルピンの謝曉仙、王旭東、長春の張智、大連の許貨亭、7 期（61 期）の劉漢中（地学教官の娘の伝言を伝える）、牛文恭（息子が浦和にいる）、陸士 56 期・軍校 1 期で満系の区助の楊春さん、蒙古軍校の恩和（エンケイ）等々と懐かしい人々と楽しい一時を過ごした。

最後は日系 7 期が抑留の折、シベリヤの地で夜空を眺めて歌った『北斗星』の歌には胸を打たれた。そして全員で、軍歌『満江紅～マンチャンホアン』を満語で大合唱して散会した。

#### ◆5月12日 長春：市内観光

ABC各班バスを連ね出発する。3 回目の観光であるが、その度に変わっている。景観と民情と政治と民意とそんな事を感じながら、先ず地質学院（かつて南新京の中心に新宮殿の建設を始め戦後完成した建物）を通過して、國務院（国会議事堂：日本の議事堂にそっくりである）前で停車する。今までは門外で眺め、医学校と化した姿を写真に納めるだけであつたが、今回は始めて中に入れたが、大理石の堅固な建物

にエレベータも無く老人にはしんどかった。中の個室は研究室、議場は免税店に、最上階には張恵景国務総理の執務室が公開されていた。

何時も我々と同行する作家中村恭子さん（ペンネーム牧南恭子）が総理の椅子に座り写真を撮って貰っていた。この階のテラスに出て見ると右手に色鮮やかな新宮殿、目の前に軍事部（陸軍省）、この周辺は緑化し観光化していた。

19年の入校時、20年の予科卒業して日本留学を命ぜられた折、関東軍司令官山田乙三大将、刑士廉軍事部大臣上将に申告に行ったこと等を思い出した。

再び乗車して満州国時代の官庁街、外事部、厚生、農林、大蔵等々が並ぶ街を過ぎ、偽宮殿と称するかつての**宮廷府**（皇帝の住い）に行く。蘭花の紋章の有る正門を入ると左手にラストエンペラーの舞台の回廊がある。さらに門を入ると正面に皇帝溥儀の居館（2F）が、中には皇帝の自室、吉岡中将と対座の皇帝、祖先を祭る仏間、寢室、婉容皇后のアヘン吸引の人形等が展示されていた。宮殿の左の家屋は区助たち軍官（士官）が正月等に皇帝に拝謁した間の由、今は溥儀の展示室になっている。この居館の裏は執務の建物、左は禁衛隊（近衛連隊）右は皇大神宮が有った様である。

今回、驚いたことは居館の前庭に江沢民の筆になる『9.18(柳条溝)を忘れるな』の碑が新たに建てられていた。最近の中国政府の姿勢を垣間見る感じがした。

ここを後に**元満映**、**元関東軍司令部**、南湖、外出の折何時も通る南関、更に多くの日本人が眠る**緑園墓地**（公園化し慰霊は許されない）を訪れ柵外で黙禱し此処に眠る7

期の冥福を祈る。次いで新装なった長春駅（95年）前の**元大和ホテル**に着く。時間があるので懐かしい日本人街の**元吉野町**へ行く。まったく変貌しパソコンの町となっていた。近くに勝利公園（元児玉公園）又新京神社（今は幼稚園）が望見できた。

**春誼賓館**（長春市人民政府指定の重点文化財一大和旅館旧跡の碑が立つホテル）で日本訪中団の解団パーティを行う。A班は大連へ、BC班は蒙古へと分かれる前の一時を日本人、韓、蒙の内輪で心許して飲んだ。

我々BC班は蒙古に向かうべく夜行寝台車に乗る。とにかく休めるときには休まないと、早速うとうと眠る。突然車外のプラットフォームより「伝田！伝田！」と呼ぶ声に起される。ホームに出て見ると張智君他20名余が見送りに来ていた。旧知の連中と手を握り別れを惜しむ。時間も迫り土産を渡され車中に戻る、車窓より手を振って車は出発した。

この寝台車は一部屋6名を4名で使用、長春ーウランホトー承德とチャーターした車両で3日間同じで車両あった。

（次号：ウランホトから承德へ）

秩父平成13年1月 70号

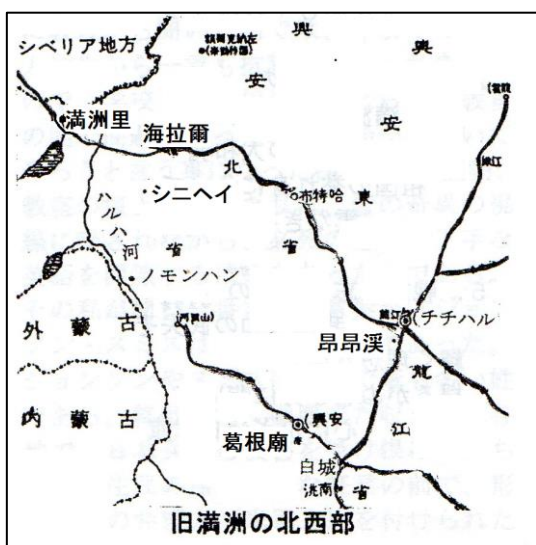
## 同徳台同窓会

2000年総会（続）

伝田 信夫 軍校1-1 経理（春日部市）

長春の日中友好会館において念願の日中韓同学聯歓大会を成功裏に打ち上げた日系の一行は長春にて懐かしい思いでの多い市内観光を済ませた翌日、蒙古の入り口の烏

蘭浩特（ウランホト：旧興安街）を目指して出発した。



#### ◆5月13日 ウランホト：蒙古パオ

夜行列車は約9時間、同室は61期の伊集院雅英君と名波敏和君、共に満州に縁がある由、もう一人は陸経10期の中学後輩の油井義隆君で前々から満州に行きたいと言うことで誘った友人である。酒の強い人、歌の出る人、愉快的声の集団も多い、自分は体調を考え寝ることにした。

目を覚ますと明け方で葛根廟の近く薄暗い草原の中を走る窓の外をしばし見て又うつらうつらする。やがてウランホトに着く。興安蒙古の入り口の街である。この地は3年前パスポートを預けて旅行したところであるが、今は一変して自由であったが未だ何時もパトカーが付いていた。中国語とモンゴル語の二つの文字が眼に入る。ホテルは一軒増えて2軒、我々を取り合いしたとのことである。2軒のホテルに顔を立て朝飯は（興安賓館）で宿泊は（興安盟賓館）となった。同徳台同窓会熱烈歓迎の赤い幕を掲げ全員総出の迎えであった。

ウランホトは昔は王爺廟、満州時代は興

安街、蒙古地区の政治と行政の中心都市である。

小憩の後バス3台に分乗出発する。アスファルトの道はない、埃をあげて相当の揺れである。先ずこの地の水贛、察爾森（チャルセン）ダムに行く。水の流れの見当たらない草原の中忽然と壮大な湖が出現する。いまだ完全ではない様だがモンゴルの治水に対する取り組みを感じる。周囲を双眼鏡で見ると日当たりのよい山合いの斜面に白い羊と遊牧民の包（パオ）が微かに見える。のどかな光景の中に飲料水と灌漑のための湖は静かに水を湛えている。

ここを後にしてチャルセン牧区遊覧に行く、小高い草のみの丘合いに行く、植林はかなり努力している様で計画的な樹木が多く見られた。

しばらく進むと、この企画を中国側との折衝に当たっていた7期の西川順芳君が、今まで行くことも見ることも許されなかった中村震太郎大尉惨殺の場所に行くとの案内があった（1931年6月参謀本部員：満州事変の折に世論の強硬論の引き金になった）。但し、写真、慰霊は一切禁止の条件である、破ったら大変な事になるので守って欲しい旨の要請があった。案内人も不気味、公安の車も随行している、不審の人物と思しき人も感ずる。車中にカメラもビデオも置いて木の生えていない小高い草山へ登る。丘の上にコンクリート製らしき碑があった、一面は中国語で（一部消えかかっていた）裏面はモンゴル語で酷い惨殺の様が記されている。人の良さそうな通訳に声をかけた所「政府のやっている事です」と余り関心のない返事、民意の実情を感じた。みんな心の中で合掌し気を新にして車に戻

り次なる地へと急ぐ。

やがて、目的地の**遊牧民の蒙古包**（パオ）の集落に着く。入村の儀式を全員が行う、先ず同行の蒙古のエンケイ君が手本を示す。少女に注がれた酒盃に指を浸し天地左右に弾き、オデコに当て馬乳酒を飲む（天地の平和を祈り）（平和を愛して敵意は有りません）との意の由。

パオの中で蒙古の衣装をつけた娘に勧められて羊肉の昼食、酒も加わり男性の歌を聞きつつ珍しい雰囲気を楽しむ。外では彼らの得意の馬術を披露し、一芸毎に客の出ず紙幣が彼らの稼ぎとなる。

50年ぶりに馬に乗るが足が締まらない、年齢を自覚した。かつて任官したら第一線にと語り合ったこともあったと思出す。遙か彼方には羊の白い群れとパオの集落が散在し、草原の生活を彷彿とさせる。半日の行程、振動する車の中で居眠りも出来ず疲れきって賓館に戻る。

明日はB班とC班とは分れ別れになるので夜はお別れの会となる。蒙古の胡弓の音色、蒙古服の楽士の歌、既に5日も行を共にしたので期の上下も無く、友校の友も心開いてマイクの空く間もない程盛り上がった。

旅行中同郷の後輩油井君とずうっと同室で寝ていた。明日は夜行寝台で17時間の予定だ、ぐっすり寝ようと思っても興奮してか寝つかれない。

#### ◆5月14日 葛根廟：終戦時の惨劇

ウランホトの2日目、葛根廟（カツコンビュウ）に行く。行程は先ず高速で走り、途中より右横に逸れ凸凹の草原の道に入る。ホトの街より南に30キロ目的地につく、降りた所は色鮮やかなウマ教の寺院の

前で一応の説明を聞く、行動に気を付けて欲しいとの事である、傍らを見ると今日もパトカーが来ている。昨日一日変な目で我々を見ていた案内の旅行会社の赤帽子の副社長が気になっていた。パオの中昨夜の宴会で意識して肩を組み酒を飲んだ。見ると今日は朋友一ボンユウ風に近づいて来る、日本では分からない様な気を使うものである。

この寺は戦前には土の家の僧院が並びウマ教の僧侶が3000余人いた大本山であった由（終戦時日本人の僧も一人いたとの事）。戦後、文化大革命の嵐の中紅衛兵の一団の襲撃に会い廃墟と化したとの事である。

軍校では1期（56期）が土の僧房を居とし野営演習をし、4期は草原にテントを張り卒業前の演習に汗を流した由である。当時は樹木の無い全くの草原であったと聞く。

この草原で終戦の惨劇が行われた。当時興安街は満州国軍が守っていたが、最後の避難列車が出た後、乗り遅れた郊外の開拓民と残留邦人は一団となって歩いて南下した（男性は動員され、老幼婦女子だけの集団である）。これに蒙古軍の反乱離脱も加わり混乱の極となった。満州国興安陸軍軍官学校の生徒隊も転進し、この混乱の中この集団の要請で護身用の小銃も貸与し、又一部生徒及び日系軍官も同行したようである。

徒歩で新京方面へ脱出を試みたが、先廻りしていたソ聯戦車隊に襲われた、婦女子中心の避難民は阿鼻叫喚のうちに千数百人が死亡、数百人が自決した。同行した蒙古系の軍校の後輩はあの山に逃げた、満軍の服

装のためか不思議に弾は来なかった。同時に進行していた蒙古系満州国軍の反乱（参謀総長を頭とした）により、内部では日系軍官及び隊付候補生（6期）の殺害或いは交戦による戦死などの犠牲者を出した。此処でも慰霊の行事は禁ぜられていたので、鎮魂を胸に街へ引き返す。

ホトに入りかつて満州時代の興安街、**興安陸軍軍官学校**を訪ねる。今は武道館が昔のまま残っている、此処で戦後最初に蒙古独立の会議が行われた旨の碑が建っていた。1期生（56期）の中には此処で区助をしていた人も居るが今でも慕われている。

次いで**ジンギス汗廟**にゆく、小高い丘の上にモンゴルの象徴、誇りとして祭られ院内の説明もジンギス汗がヨーロッパまで制覇したとの侵略の言葉と重ね合わせ奇異な感があった。本院の前からは街の彼方まで一望に見える。

夕刻宿に戻り、B班、C班と添乗員、更に賓館の従業員と別れの写真を撮り、B班は先に長春より来て待っていた列車に乗り込む。列車は軟座の寝台車普通片側3段の向かい合い1部屋6人であるが、これを2段4人でチャーターしたが日本で考えるより快適とは言えない。更に設備は国内の地域差が大きく東北地区と上海近辺を比べると天と地の差がある。これを知っているだけに今回も家内の希望を入れず単身で来た。

発車と共に赤い夕陽を見ようと同席の3人は賑やか、その前に葛根廟駅を通過する頃、草原の彼方に先ほど訪れた山と塔が見える。再び訪れることは無いだろうと同期の冥福を祈る。次は承德への分岐点、**白城市**に停まるので見ようと心待ちにしていたが

夕闇ではっきりしなかった。

ここは避難民が駅でソ聯機の空襲に合い3期の陸士を卒業して間も無い先輩が戦死した駅であると聞く。兎にかく時間が有ったら寝ることに勤め下段のベットに入る。酒が入り元気のよい声がある。

窓辺の通路で50年前の思い出を語り合う者に乗せて17時間の夜行列車は動き出した。途中ベットから落ち怪我をする者、血圧計を必要とする者、持参した薬と器具が思わぬ役を果たした。

明け方赤峰市の駅をうつつに聞き、承德市に近かずいたことを知る。

#### ◆5月15日 承德：ラマ教の町

AM10時頃 承德へ着く。駅に近づくにつれ車窓よりラマ教（チベット仏教）諸寺の建物が目に入る、駅だけは立派である。バスにて新しいガイドの案内で雲山飯店に入る。小憩の上昼食に行き次いで観光に出発する。

先ず**避暑山荘**（清の離宮、北京の夏の暑さを避けての皇帝の避暑地、政務も行う熱河離宮である）の門前に着く、入場料は30元の由、兎にかく広大な設備である、敷地を囲む城壁は10kmに及ぶとの事、正門は麗正門といい漢字のほかに、満州語、モンゴル語、チベット語、ウイグル語でも記されている。

終戦時、この堀の中はこの地の師団の集結した所であると同期の韓国の獣医候補生が教えてくれた。その折、彼等には国府からも中共からも誘いがあったがそれに応ぜず国へ帰ったと当時の状況を話してくれた。



承徳のラマ教の寺院・民族衣装の女性と

一方、日系は関東軍と合流し軍校 1 期（56 期）が分隊長で 6 期と共に長城を越え北京経由で帰国したとのこと。この道を 2 期（57 期）の韓国朴大統領も通り韓国に帰り、日本の 60 期で復員した軍校 6 期より遅れて韓国の陸士に入ったと聞いている。

園内の清王朝の政務区、居住区と専門のガイドの説明を聞き、湖沼の船に乗り各楼を巡り舟遊する。団長夫妻の皇帝、皇后の服装を中心に記念撮影をしたり、サボテンを思わせる奇岩が見える磬鍾峰（けいすいほう）を望見した。

次は外八廟（避暑山荘の周囲に建てられたチベット仏教寺廟郡の総称）の 1 つ普寧寺を見る。階段が多く疲れ、皆ゆっくりと歩き土産店に至りその椅子に座りお茶にあり付きバスに乗る。夕食は体調常ならぬ者が多いので控えさせられていた酒を要求する。この酒がうまく土産にかなり売れた。中国の旅に慣れない初めての人は水にやられ、体調を崩し絶食したり、薬の世話になったり苦労していた。

#### ◆5月16日 承徳—北京：万里の長城を越えて

観光も終わりに近づき今日はここから 250Km離れた北京に入る日である。昨日

の外八廟の続きで普陀宗乗之廟に行く。ここは一連の寺院の中で最大の規模である。全部見学することを止め途中で休憩して皆の帰りを待つ。この間 1 期先輩と共に寺院の写真屋で借りた古来の高貴の服装をした女性を交えて写真撮影して楽しむ。

次に、普樂寺に行く、ここはユニークな寺で、先ず住職不在で紅衛兵の難を免れた由、寺内の像は色欲を表した珍しいもので撮影は禁じられていた。

約 4 時間の汽車の予定。北京の有名な友誼飯店に行きたいとの条件を満たす前提で発車に間に合わず。北京への鉄道は岩山と溪流の脇を走る、熱河の中国の中でも珍しい景観である。今は河北省であるがかつては長城まで満州国であった。

3 期(58 期)の新任班長（パンチャン：小隊長）が教官殿煙草を吸って下さい、何故かと聞くと休憩後の出発は隊長のそれが終わってからと兵が見ているとの事、以後は下士の長の煙草の揉み消しを合図とした等と 50 年余前の事を聞きながら時間を過ごす。

皆窓の外に目を凝らす、万里長城を見んがため、やがて歓声が挙がる、一斉に片側の窓辺に動く、山の稜線にのたうつ竜の如く独特の姿の長城が見える。パチパチとシャッターの音、見るものは見たとやっと落ち着いて席に戻る。北京に近づくと窗外は一変し平野そして青々とした畑又高速道路、看板と市街が近いことを感じる。流石に大都会市街地を走り駅に着く。

悠久の歴史を誇る都、5000 年のドラマが繰り替えされた舞台、東京に並ぶ人口を有する首都北京ともほんの束の間の滞在である。それではと閉店前の有名な友誼飯店



に荷物をバスに入れたまま直行した。それぞれ、買い物を買ませ急いで食事の場所に行く。此処での夕食は、明日日本に帰るB班の解団お別れの会でもある。感謝と友情を誓いマイクの飛び入りも活発で時間の経つのも忘れ歓談する。

ホテル崑崙飯店より北京の同期が3時間も待っていると連絡がきていた。急遽出発、11時近くホテルに着いた。玄関で早速彼等に迎えられ握手を交わす。彼らは長春に行けず2人で3時間も待っていてくれた。彼らが東京に来た時は我々が歓迎会をするが、同じように彼らも待っていてくれたのである、これが我々友情である。既に夜11時も廻らんとし、明日は5時出発、語る時間もなく又彼らも帰る術も無くなる心配もあり、写真を撮り再会と自愛を祈り別れる。

#### ◆5月17日 北京—東京

朝5時、此処で分かれソウルへ帰る韓国の6期、7期の大学名誉教授の2名に見送られて北京空港に向かう。道路の両側の街路樹はすっかり成長し森の中を行く感である。1時間で青島(チンタオ)に着く。チンタオビールを思い起こす。全てバスからの見学、初めての土地であるがかなりのスピードで開発が進んでいる模様。香港(ホンコン)の資本で開発はこれからのようだ。大きい建物の中は空室が多いが、近い時期に躍進が期待されている。

ドイツの租借地として発展し今もその面影が残る。これらの古い建物は政府の保養地として利用するか、一部は政府が保管管理して居る様である。海浜で車外に出て小憩の後あわただしく飛行機に乗る。此処で福岡と関空行きに別れる、東京組は福岡

より乗り換え羽田に行く。

福岡に着きやれやれと本当にほっとした。ほっとしたのか16:30発の飛行機に相撲のテレビを見ていて遅れそうになるハプニングを演じた者も居たが、20:00羽田着家路に向かった。

#### おわりに

9-10日にわたる中国の旅、10年間の付き合い、半世紀にわたる関係、ほっとした満足感を味わう。5月11日に於ける桜贈呈式の日本側団長の挨拶の締め括りは『此処に10年の結実として花が咲きました、この花をもっと多く、平和と友好の証として咲かせたい、日本よりの植樹は輸入の関係で難しい、今この長春の桜の花と日本の桜の花粉と交配して新しい苗を生み出すべく計画していることを宣言します』と。

国破れて山河なし、青春の熱き思い一瞬にして無に帰す、爾来半世紀、かの国の友は文化革命と戦いまた一部の人は海をわたり台湾に行く。隣の国の人は朝鮮動乱と南と北に別れそして軍事革命を経て経済復興を達成する。わが同胞はシベリヤに行き、中共に抑留され、日軍と行を共にし、又一部は在留邦人と行動を共にせざるを得ない環境に有った人、国府軍に参加戦闘した人、建軍運動に参加して散った人、生還した人、満軍反乱の犠牲になった人、割腹その他自決した人、偶々日本留学中で終戦を迎えた者、終戦時の満軍に於ける日系の数は私自身の資料では定かでないが、軍校在籍は1300余と聞いている。

8月15日当時在満の軍校出身者は約800名と想定する。過酷な運命を辿り今幾人が生存しているだろうか。

こんな想いの下、友誼の旅、鎮魂の旅、

最期の旅と思いつつも母校に入れぬ現実、誰言うとも無く 21 世紀にもう一度会おうではないかと散会した。先輩や遺族の方々の中には、旅の宴の中で誕生日のセレモニーをして貰った人もいたが、思い出深い旅を終えたと思う。

友校の友は、この同窓会をどのように感じただろうか、何れにせよ行を共にし愉快地過ごした事を感謝し、諸兄らの更なる多幸を祈る。